

JOURNAL OF KANPO MEDICINE AND HERB

漢方臨床のための ◆ 月刊

漢方療法

9

2004
SEPTEMBER

特・別・企・画

■ 巻頭インタビュー 73 渡辺賢治氏

漢方と他科との連携で包括的医療を構築
患者に学び、患者のための医療を追求する

好評連載

■ 『方函類聚の処方』 89 脚氣(3) 足立秀樹

■ 各科の西洋医学的難治例に対する漢方治療の試み 14

織部 和宏・首藤孝夫



たにぐち書店

慶應大学医学部東洋医学講座・渡辺賢治氏に聞く！ 漢方と他科との連携で包括的医療を構築 患者に学び、患者のための医療を追求する

「漢方をやるならまず西洋医学を学びなさい」という師・大塚恭男先生の教えに従い、幅広い勉強と様々な研鑽を重ねてきた渡辺賢治氏。米国内科学会の上級会員の資格を持ち、漢方の国際化を唱えながら、日本古来の漢方の伝統を守るといふ思いがある。氏が歩んだ道のり、そして氏が見据える漢方の将来とは――。



■渡辺 賢治 (わたなべ・けんじ)

昭和34年、埼玉県与野市に生まれる。同53年、武蔵高等学校卒業。同59年、慶應義塾大学医学部卒業。同年、同大学附属病院内科入所。同61年、足利赤十字病院に転属。同63年、慶應義塾大学附属病院内分泌内科入所。平成2年、東海大学免疫学教室に転属。同3年、スタンフォード大学に留学。同5年、スタンフォードリサーチインスティテュートで研究を行う。同7年、北里研究所東洋医学研究所に入所。同13年、慶應義塾大学医学部に転属、現在に至る。日本東洋医学会評議員。

三人兄弟の末っ子で活発な少年時代

本誌 先生のご出身はどちらですか。

渡辺 一九五九年、埼玉県与野市（現さいたま市）で、三人兄弟の三男として生まれました。父はエアフィルターの会社を営んでおりましたが、早世してしまい、さらに戦争で工場は軍需工場として没収されてしまったため、父は一から出直したものです。

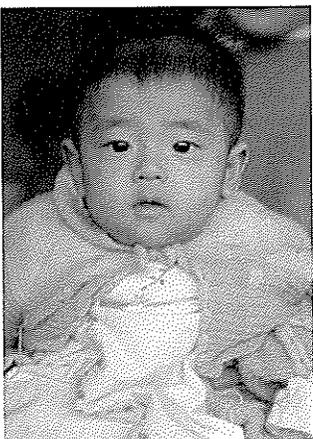
本誌 独立の気概にあふれた家系なので、お母様はどのような方でしょうか。

渡辺 母は大変に教育熱心な人で、僕ら兄弟を埼玉大学附属の幼稚園、小学校に

通わせるために浦和へ引っ越しました。五歳のときでした。まさに「孟母三遷」ですね。

本誌 どんな少年だったのですか。

渡辺 先生からよく叱られる活発な子でした。休み時間に友達とケンカしていて、授業が始まったのですが、担任の体育の先生が、「飽きるまでやらせておけ」ということで、ずっとケンカをしていた思い出があります。のびのびとしたい先生でした。勉強もそこそこやりましたが、運動が好きで少年でした。小学校一年生からスイミングクラブに通っていて、六年生のときに市民大会で優勝した経験があります。今はスポーツクラブで泳いでも、体がなまってしまってもうだ



幼少時代の渡辺先生

めですね。

兄弟は性格がばらばらで、長男はおおらか、次男はわが道を行くタイプ。三番目の私は要領がいい（笑い）。兄たちの失敗を見て学びました。家庭環境に恵まれて、のびのびと育ったと思います。

埼玉大学附属小学校から、私立武蔵中学校に進学しました。大らかな学校で、高校まで楽しく過ごしました。

師・大塚恭男先生との偶然の出会い

本誌 医学部を志されたきっかけは。

渡辺 性格がまったく逆の次兄が東大医学部に通っていたことから、自分は違う道を選ぼうと、弁護士になるため法学部を目指していました。古典などは好きで一生懸命勉強しましたが、文系だし化学は勉強しませんでした。それが高校三年生のとき、偶然、父から勧められた大塚恭男先生編集の医学の本を読んで感銘を受け、やはり医者になりたいと、理系に転換しました。その本には、「西洋医学は体の部分を見るが、漢方は全体を見る

ものだ」ということが書かれていて、面白いなと惹かれたんです。「兄弟で違う道に進もうと言っていたのに」と次兄には反対されましたが、自分は漢方という変わった道を歩むから、と説得しました。

本誌 それが、後に義父となる大塚恭男先生との出会いなんですね。なぜ、面白いと共感されたんでしょうか。

渡辺 中学、高校時代に、少林寺拳法を習っていました。日本で五本の指に入るような先生が指導してくれていた道場に学校から帰ってすぐに通っていました。その先生が軽く蹴っただけで、剣道の胴着がパカッと割れる。「氣」というか、間合いというか、そういうものがピタッと合うと、すごい力を発揮するものなんです。その先生が、自分の指を動かしながら「どんなに科学が進歩しても、人間のように精巧な動きをするようなロボットはできない」というお話をよく聞きました。大局的に物を見る少林寺拳法と漢方の考え方には、どこかつながるところがあったんですね。非常に納得できた



医事振興会にて健康診断の手伝い

んです。

私は持続力はないんですが、瞬発力はある方なので、文系から理系に転向し、ここぞと決めた一年間は猛勉強して、慶應大学医学部に入学しました。

本誌 医学部入学時には、すでに漢方を志されていたのでしょうか。

渡辺 その思いはずっと持っていました。大塚先生は私にとってのヒーローの

ような存在だったんですね。大学に入学してすぐに、北里研究所に行つて初めて先生に会いに行つたんです。「漢方を勉強したいのです」と言いに行つたのです。先生から「頑張りたまえ」という言葉を掛けていただけたかと期待したら、シャイな先生は何もおっしゃらない。私も緊張して何も言えませんが、沈黙の時間が過ぎてゆく。「何で慶應に入ったの？」と聞かれてがっかりしたり（笑い）。かなりつらい初対面でした。でもその中からうじていただいた言葉は、「漢方をやるなら西洋医学を学びなさい」というものでした。

本誌 大塚先生の印象は。

渡辺 インド人みたいだな（笑い）。目のことにとらわれない、大きな宇宙を見ている人だ、という印象でした。

無医地区で医療活動のボランティアを

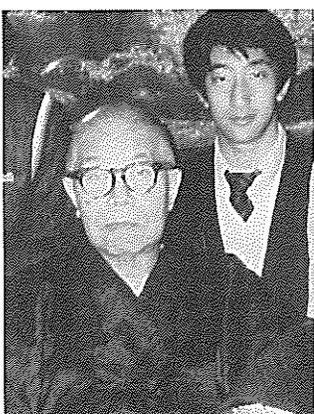
本誌 医学部時代はどんな生活を送っていたのですか。

渡辺 サッカー部と、「医事振興会」と

いうクラブに所属していました。ほとんど講義には出ずに、部活ばかりやりました。医事振興会とは、無医地区で実地の医療活動をするボランティアです。年に二回の健康診断のほか、家庭訪問をして地域のひとと酒を酌み交わしながら、健康管理についての話をすることです。腰痛体操や食事指導などをする事になりましたが、ほとんど朝から飲んでいただけでした（笑い）。五年間は訪問場所を固定して持続的に活動していて、僕らのころは福島県の会津地方、只見川の上流の金山町に通いました。田舎らしい田舎がない私にとっては、自然の中で野菜を採ったり、鮎を捕ったりと懐かしい場所です。第26代部長として、かなりのめりこみましたね。

本誌 そのご経験は今に生かされているのでしょうか。

渡辺 活動を通じて、いい仲間がたくさんできたことはもちろん、お金を出しても買えない、ものの豊かさについて考えさせられました。例えばとれたてのきゅう



武見太郎氏の御自宅で
(慶應大学時代)

りを食べる川で鮎をつり川岸で焼いて食べる。人間の豊かさとはこういうことなのかということも感じました。地域の私たちと同じ目線で、という横柄な言い方かもしれませんが、そういう立場でお付き合いをしてきたことが、今でも子供や患者さんと話すときに役立っています。目線というのは、診療においてとても大切なものなのです。それを学びましたね。

長谷川弥人先生の教え

本誌 当時は漢方とのつながりはあったのですか。

渡辺 大塚先生はもちろん、学生時代に、漢方に関してもうお二人、出会いがありました。慶應の薬理学の教授でツムラ研

究所所長をされていた細谷英吉先生と、慶應の元内科教授でいらした長谷川弥人先生です。とくに長谷川先生には、漢方を教えていただきました。吉祥寺のご自宅まで一年ぐらい通いました。そこで、漢文や、人生の教訓も含めていろいろなことを教えていただきました。軍医のご経験がある先生は、軍のお仲間から聞いた「中国の山には木がない。山に木を生やすためには、いきなり植林すればいいのではなく、下草、灌木、中木を植え、そして高木と植えていかなければ、定着しない」というお話をよくされました。先生は、学問も同じで、徐々に地盤を作っていくもので、はじめから高い木を植えようなどとは考えない方がいい、と教えてくださったのです。この言葉は今でも非常にありがたいと思っています。

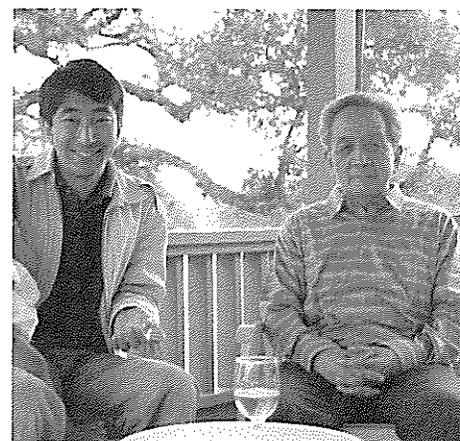
ちなみに、この研究室にある書籍はすべて長谷川先生の寄贈本なんです。全国の図書館で入手したコピー本など、浅田流漢方の流れを汲んだ貴重な蔵書ばかりです。古書はすべて図書館（信濃町メデ

ィアセンター）に寄贈して、「長谷川文庫」と名づけていただきました。これはお世話になった長谷川先生への私の恩返しです。

本誌 医学部を卒業されて、内科に進まれました。

渡辺 卒業間際、どこの科に入ろうかと悩んで、再び大塚先生に会いに行つたのです。大塚先生は、「ちゃんと西洋医学を学ばないと、漢方の良さは分らない。内科に行きなさい」と言われました。ところが、慶應の元内科教授である長谷川先生は、「内科はいいから、すぐに漢方をやりなさい」と（笑い）。結局、迷って内科を選びました。一九八四年のことです。

慶應の内科は比較的にのんびりしたところで、患者さんとしつくり話ができましたし、末期がんの入院患者さんを泊り込みで診た経験も数多くあります。いまだに、賀状のやり取りが続いているご家族もいます。患者さんの数は多くはありませんでしたが、じつくり患者さんと向き合うという意味において非常に貴重な時



恩師・大塚恭男先生と

間だったと思います。

その後、出張で足利赤十字病院に二年間勤務しました。独身でしたから泊り込みも多く、ハードな生活でしたが、医師としてのいろいろなことを学びました。急性期病院でしたから亡くなる方も多く、ご家族の同意を得て、多数の剖検を取りました。あまり自慢できる話ではありませんが、剖検率一〇〇%で表彰されたこともありましたね。貴重な症例は英文にまとめた臨床報告もいくつかしました。

本誌　そこで学んだことは。

渡辺　このころ、「死の医療」に対する

興味があったんです。実は、告知をしたことで動揺した患者さんが病院から逃げたまま、告知するという事に関しても、患者さん同士が話しをすれば事実を知ってしまうこともあります。ここでは忙しい日々でしたので、末期がん患者さんの話をじっくり聞くような時間も取れないのです。そういうジレンマがありました。本を読んだりセミナーに行ったりしました。ある先生を東京からお呼びしてセミナーをしていたのですが「患者さんに背を向けて三十分話をするよりも、五分であっても、きちんと時間を決めて全力で患者さんと向き合うことのほうが、はるかにいい」というお話から、緩和ケアのあるべき姿勢を学びました。

結婚、そして米国留学時代

本誌　先生の奥様は、大塚先生のお嬢様ですね。

渡辺　そうなんです。あるとき、珍しく大塚先生から連絡があり、初めてご自宅

に招いていただいたんです。例によって先生はお酒を飲んでいただけで何もおっしゃらない。本当は、北里研究所で医師が足りず、私を誘ってくださいるつもりだったのに、当時内科医として脂が乗ってきている私に言い出せなかつたそうです。そこでたまたま出てきた先生の娘――今の家内ですが、と出会いました。彼女は当時東京女子医大の六年生で、医師国家試験を受ける前でした。国家試験の勉強を見たことが結婚のきっかけです。

本誌　ご結婚はいつごろでしたか。

渡辺　平成元年五月に結婚式を挙げました。結婚したときに妻から言われたのは、「名医にならないでください。良医になつてください」という言葉でした。当時は研究で有名になってやろう、とギリギリしていましたので、頭をがんと叩かれた気がしましたね。

本誌　深いですね。

渡辺　大塚先生からは、学位を取るよう言われていたこともあり、大学に戻って内分泌内科で糖尿病の研究をすること

にしました。糖尿病は全身疾患で、包括的に体を診る医療として、漢方とつながるものがあるのではないかと考えたんです。当時の研究室では、I型糖尿病の免疫異常を探る研究をしていました。途中から、東海大学の免疫学教室の垣生園子教授のところに通い始めました。昼間は慶應で臨床をして、夕方、車を飛ばして東海大学に行き実験を始めて、夜中の二時三時に終えてということ、週二回くらいやっていました。眠いし疲れているし、帰りの東名高速ではずいぶん危険な目にも遭いました。そういう生活の中で、研究が面白くなり、国内留学の形で、平成二年から本格的に東海大学へ行きはじめたのです。

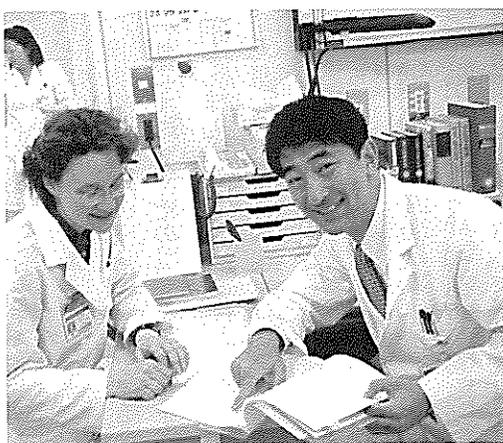
東海大時代は研究にのめりこんで、夜中まで実験をする生活をしていました。なかなか結果が出ずに苦しい思いもしましたが、最終的には米国の医学雑誌「ネイチャー」に投稿もしました。

本誌　米国留学もされましたね。

渡辺　免疫を研究するために、スタンフ

ォード大学に留学しました。留学にあたってご尽力いただいた奥村康先生(順天堂大学医学部教授)にごあいさつに行つたところ、「上から受けた恩恵は上に返さないで下に返しなさい」と怒られました。奥村先生も私の人生にとって大きな存在です。

スタンフォード大学では、素晴らしい環境の中で二年間、研究三昧の日々でした。そこで外人コンプレックスもなくなり、たくさんの方々と人間対人間の付き合いができて、いい経験をしました。



北里時代、シェーファー博士と外来にて

研究を続けたくて二年間の予定を延長し、附属の研究所である Stanford Research Institute に移って分子生物の研究を一年半ほどしていました。帰国して念願の北里研究所東洋医学総合研究所に入ったのです。

北里研究所で

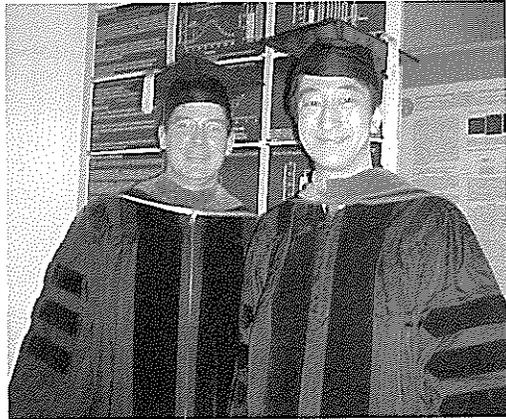
念願の大塚先生の弟子に

本誌　いよいよ本格的に漢方に取り組むことになったのですね。

渡辺　十八歳で大塚先生に初めてお会いして十七年、ようやく念願だった先生の弟子となったわけです(笑)。

本誌　大塚先生から直接ご指導を受けたのですか。

渡辺　外来を見学していても、大塚先生は何もおっしゃいませんから、昔ながらの丁稚奉公ですね。学生に自分で調べさせるんです。今は医学教育が、丁稚奉公というか、学生にこちらから何でも与えるのではなく、自分で考えさせる教育に変わっています。われわれ教員は、なる

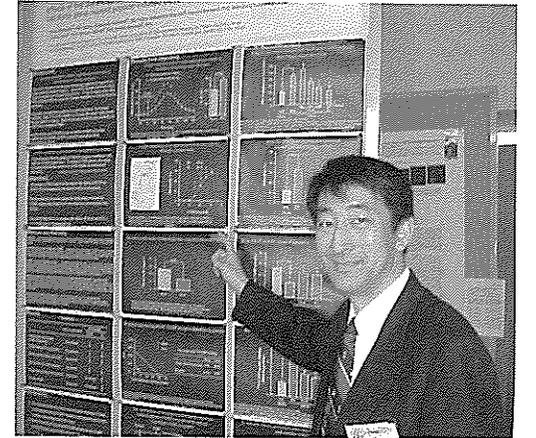


米国内科学会にて上級会員に承認、となりは慶應に留学中のプロトニコフ医師

ある程度客観的な評価もしたいと思いいろいろな検査を組み合わせて実験もしたのですが、これはとても大変な作業でした。北里研究所の一つの限界は、病院は保険診療なのに、東医研は自費診療ですから、検査をするためにわざわざ病院にかかってカルテを作り直すような手続きが必要なんです。また、煎じ薬は煎じる時間が違うと成分の抽出効率が変わるので、臨床研究には向きませんでした。一方で西洋医学にできないものとして立ち上げた、冷え症外来は漢方らしいもの

で、かなり評判が良かったと思います。幅広い交友関係を生かし他科と連携本誌 東医研にはどのぐらいいらっしやいましたか。
渡辺 六年間いて、二〇〇一年に慶應大学に戻りました。しかしいざ戻っても、研究室も機器も何もなく、研究室を借りて、少人数で研究を始めました。同年十二月に、今の研究室に移ったのですが、部屋の仕切りからデザインし、研究機材は他の病院の研究室からもらいました。ここは拾い物ともらい物でできているんです（笑い）。外来である漢方クリニックでは一コマを担当しました。
私の財産は幅広い交友関係だと思っております。すぐに産婦人科との共同研究を始め、外来ではチーム医療をやるうと、皮膚科と共同でアトピー外来を立ち上げました。そのために、一年間勉強会をして、皮膚科と漢方クリニックとで意見のすり合わせをしました。今でも皮膚科とは合同カンファレンスを行っています。

本誌 皮膚科の先生方には漢方への理解はあるのでしょうか。
渡辺 たまたま助教教授が私の同級生なので始めたのですが、理解のある先生方と一緒に。だんだんというゲームになってきている気がします。
本誌 漢方クリニックは変わりつつあるのですね。
渡辺 北里の東医研にいらした渡辺賀子先生には、「漢方女性抗加齢外来」を担当していただいています。この外来の目玉は食養科による食事指導で、受診される患者さんも、始めは半信半疑でも、はまってしまいうそうですよ。その素晴らしい食事指導にいろいろな科にまたがっている横断的な漢方が他科とタイアップすることで、包括ケアモデルができないかという発想なんです。中心にあるのは患者さんで、患者さんを囲んでどのような医療が追求できるのかということが大事な点ですね。
本誌 先生は米国内科学会のフェロー（上級会員）でいらっしやいますね。



米国内科学会にてポスター発表、優秀賞を受賞

べくしゃべらないということになっていくのです。そういう意味では、大塚先生は当時から最先端を行っていたと言えるかもしれませんね。

本誌 北里研究所での経験は。

渡辺 生薬一味一味から煎じ薬までじっくり勉強できました。また、世界の財産といえる医史学研究部や薬剤部の先生方から教えていただいたことは、計り知れないほどです。生薬も食べ尽くして、半夏で咽喉が苦しんだこともありまして、烏頭で心臓が苦しくなり、死ぬかと思っ

たこともあります。今も生きていますけれど（笑）。

漢方の医師であると同時に内科医でもありますので、その二つを橋渡しする行動もしました。

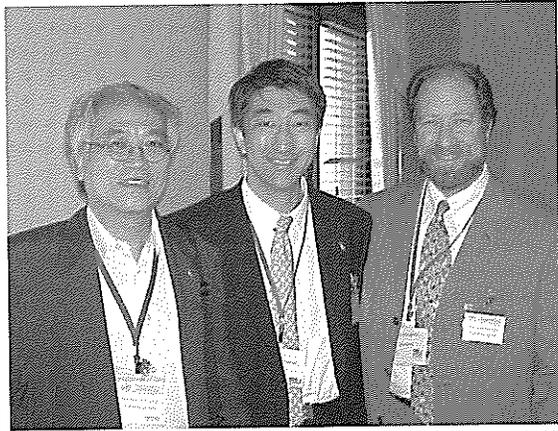
北里時代の私のテーマは、チーム医療と緩和ケア、食養生でした。医者になってからずっと考えていたのは、「医者として自分は何をやりたいのか」ということでした。私自身、病気の最初と最後の部分、つまり、予防と末期の緩和ケアをやりたいかったです。アトピー性皮膚炎の治療などをしていっていると、食事が非常に大切だということがわかります。そこで、食養生について、まずは栄養科と定期的に勉強会を始めて、栄養士さんたちと一緒に「北里養生食」として独自の食養生法を作りました。体を冷やす食材、温める食材を考え、油を一切使わず、天然塩を使い、食物繊維の量まで決めた手作り食です。それから、麻酔科、外科、漢方、食養科で緩和ケアチームを作りました。緩和ケアの病棟を作りたいかったです

が、許可が下りず、代わりに病床を四つもらいました。

本誌 漢方は緩和ケアにどう役立つのですか。

渡辺 QOLの改善ですね。がんの患者さんが多いのですが、漢方薬を飲んでいると食欲が出るというんです。食欲は生きる意欲にもつながります。また、食べることで腸の免疫が刺激されて生体が活性化される効果もあります。食養科と協力して、末期の患者さんの食欲が湧くように、薬膳酒も作りました。

充実した日々でしたが、同時に、漢方薬の限界を知ったことも確かです。内科の限界を見て漢方を学びましたが、漢方の限界も見えてきました。まだ漠然としていましたが、どういう形で漢方と西洋医学が共存すればいいのかということですが、そのところからの私のテーマでした。その答えは、今も模索中です。西洋医学にできないことを漢方が担い、西洋の立場から「さすが漢方」と言われるようなものを構築していきたい。そのためには、



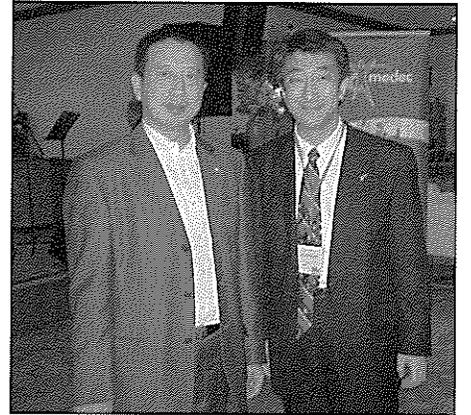
NIH研究の仲間 香港大学のリャン先生とハーバード大学のEisenberg先生

大切なのは、患者から学ぶこと
本誌 お忙しい日々をお過ごしだと思えますが、お休みは何をしていらっっしゃいますか。
渡辺 家族（妻、中学一年生の長女、小学校三年生の長男）と過ごす時間は安ら

いということもありますが、大塚漢方の継承者の一人として、日本古来の漢方を守るといふ二つの思いが、自分の中に両輪のように存在しているんです。

本誌 座右の銘はありますか。
渡辺 やはり、「患者から学ぶ」ということですね。勉強をさせていただいてありがとうございます。という気持ちを持つのは大切なことだと思います。日々の忙しい診療の中でも、患者さんから学ぶ、一緒にものを考えていく、という姿勢は医者の基本だと思っています。かといって、患者さん任せにするのは無責任です。常に、目の前の患者さんが自分の家族ならどうするかと考えて診療に当たることを心掛けています。
本誌 今後は、どのような活動をしていきたいとお考えですか。
渡辺 漢方薬の全医薬品に占めるマーケ

ットシェアアは一九九〇年頃の二・五％をピークに減少しています。今は一・三％くらいでしょうか？漢方が医者の世界に在る限りにおいては、漢方のマーケットは広がらないと思っています。もつと漢方の世界を広げていくような活動が必要で、異業種の方々との交流を通じてものを見ていかなければ、漢方の発展はないのではないかと印象を持っています。漢方が社会のニーズに込えているのかと考えると、医療用であるがゆえに、医療の世界で満足してしまっているところがあります。幅広い交遊関係を生かして、漢方の将来性について意見交換をしていきたいと思っています。病気の予防、QOLの向上など、漢方の良さはまだまだ見直されていくと信じております。近いうちに、予防医学、混合診療の流れがきます。そうなったときに漢方のチャンス。漢方の時代が来るな、という予感がしています。
本誌 本日はお忙しいところ、誠にありがとうございました。



元WHOアジア地区代表のチェン・ケン氏と（メルボルンにて）

渡辺 内科の世界からしばらく離れていたのですが、内科専門医に漢方の専門家がいないものですから、内科でもう一度活動をしようかと考えて、米国内科学会の上級会員に応募、承認していただきました。やはり、これまでの漢方に携ってきた中で、西洋医学が分からなければ話にならないという部分を感じていたんです。ですから、内科でもそれなりの実績を残している人間が漢方をやっている、というところを自分の強みとしよう。学生時代から大塚先生が口を酸っぱくして言われていた、西洋、東洋両医学を学

ぶということの意味を改めて感じて、ありがたいと思っています。
世界に通用する医者を育てる
本誌 現在のご活動についてお話しただけですか。
渡辺 研究室の人手不足が解消されて、医学部、薬学部の学生が来てくれるようになりました。ようやく研究も軌道に乗り、実績も出始めて、昨年、今年の和漢医薬学会で賞もいただきました。漢方の教育に関しても、順調にコマ数が増えて、来年度からいよいよ必修科となります。海外との共同研究も盛んで、ハーバード・ミネソタなどと共同研究をしております。副産物としては米国内との交流の中で、共同研究のメンバーがハーバード大学のカリキュラム委員ということから、教育システムを知る機会があるのですね。慶應大学内に医学教育統括センターがありまして、一年生から六年生までの医学教育をすべてプログラムしています。「医学部の教育を変えるためには若

い力が必要だ」という医学部長の新たな方針で、私もそのメンバーに入れていただきましたので、教育について提言をしていく立場になりました。もちろん、漢方医学だけではなく、西洋医学の知識も含めて、日本一の医者、世界に通用する医者を育成するような教育を、さまざまなアイデアを出しながら仕掛けているところです。
先日、学内に「サイバーメディカルスクール」という医学教育の組織を立ち上げました。医学部の学生が、大教室で講義を受けるのではなく、難しい患者さんに会ったときに、自ら解決していくことができる能力を身につけるという目的です。空いた時間や講義のないときに来て、コンピュータ内にある教材を使って調べ物ができるんです。その教材を選ぶお手伝いもさせていただきました。
学生には、最先端の知識はもちろんですが、先人たちの遺されたものから学ぶ姿勢も身に付けてほしいと思っています。大学の中で国際化を推進していき